

## 小松原の法難

### 一

十一月のあい色の空の深さは、四季のいろとりどりの中でも、もつとも魅惑的なものである。そのあい色の空を映す地上の水は、すみにすんで、たとえ、どんな水溜りであつても、澄みきつているものである。

こんなところにこんな水溜りがあつた。こんなところにこんな池があつたのかと、はつきり、人に印象づけるのもこの季節である。何故ならば、水がすんでいるからである。のぞいてみると、水の底は、人が思ったよりも複雑な高低と、大小の窪みがあるのに驚く。水の底を人がのぞくのも、この十一月の季節である。

安房国の東条村の小松原近くの松影に身をひそめながら、水溜りに映る、しかし実の影をじいっと、みつめている物具をつけた者が二人いた。

先程から、黙ったまま、身も動かさないでいる。これはもの見の役の者らしい。

ややしばらくして、駈けてくる人の足音がしてきた。

二人の者は互いに顔を見合せて、合点しあつた。

足音が二人の側を駈け抜けようとすると、ひよつと、二人とも立ち上つた。

「おいこごだつ」

「ああ、そこにいたのか、あやうく、駈けぬけるところだつた」

「して、首尾は………」

「上々だ……」

「よろしい、では、その旨はこの俺が伝えに行く、貴様はここで休んでおれ」

そういつた男は、すぐに駈け出して、松原の中にみえなくなつていつた。

また二人になると、二人とも松の小影に身をひそめて、ぼそぼそと話しはじめた。

「で、日蓮坊主の一行の人数はどの位だ」

「俺はそんなことは知らないよ。そこまでは俺の役ではないんだ。また後から誰かがすぐ知らせてくることになっている」

「ああ、そうだったなあ。その報せがきたら。今度は俺が駈け出そう。半日近くも、水溜りの雲の動きをみていたんで、くさくさしてしまつた。お前は、どこから駈けてきたんだ」

相手の男は、やっと、息づかいがおさまったとみえて、落着き払った声で、もつたいをつけて話し出した。

「華房村の入口近くに、俺達はひそんでいたんだ。すると村の中から、知らせがあった。日蓮坊は今日たしかに村を出て、天津の工藤の屋敷にゆくというのだ。人数はまだ華房村の寺を出ないからわからないが、寺の附近の稲叢に、こっちの見張りがついているから、何人だか、どこの道を通るか、それを追っつけ知らせがある筈だ」

「そうか、どこの道を通るかまだ分らないのか、ふうむ。人数はそう多くはあるまい、一人で、どこでも、ひよこひよこ歩きまわる坊主だから」

「でも、今日は違うぞ。かりにも、天津の領主工藤左近丞吉隆の屋敷に招かれてゆくことから、ひよこひよこ歩きではなからう。弟子もつれて行こう、華房の蓮華寺の檀徒も四、五人は送ってくるだろう」

「幾人きたとて、手強い相手は一人もおらない。ただただ、どっちの道をえらぶかということだ。山の路を通って、いつきよに天津の浜におりてくるか。一人ならば、山路をえらぶだろうが、お供があれば、そんなことはしまい。この東条の村近くを通って、海ぞいの道をえらぶだろう」

「そうになったら、馬鹿というか、大胆不敵といおうか、すごい坊主だなあ」

「なあと、その位のこととするかもしれない。鎌倉の御執権さまの屋敷近くで、御執権さまの政治が悪いと、非難攻撃するかと思うと念仏無間、禪天魔、真言亡国、律国賊、とくるんだから、たいした勢いさ……」

「大きな声ではいえないが、安房国の地頭職ぐらいは、怖くないかも知れないなあ」

「馬鹿、自分の主人の悪口をつく奴かおるか。口をつつしめ。とはいうものの、日蓮坊の腹の中はそうかもしれないぞ」

「おや、足音がするぞ」

「きたきた、しらせがきたのだ」

後の伝令がきたらしく、駈けてくる人の気配がした。

もの見の役の者は、松の樹影から身を現わすと、自分の所在をつげた。

「どうした……」

「おう。そこか。日蓮の一行は七、八名、この小松原をめざして、たしかに来るぞ」

「そうか、ようし、貴様ばここで休め、後は俺が飛ぶ。では、手筈は前からきめた通りだ。うまくゆけば褒美の金はたんまりだ」

東条左衛門尉景信は馬上にあつて悠々と歩をすすめていた。引き具する同勢は三百人。弓を持つもの、槍を担ぐもの、いざ鎌倉と、幕府に上る姿と少しも変わるところのない、堂々たる軍勢である。

「日蓮の一行はわずかに七、八名」と見張りのものから使いがあつても、最初からの態勢を少しもくずさなかつた。何故であらうか。

それは聖人の一行を、皆殺しにしようという魂胆であつた。一人でも、その当時の事情を、敵方の口から、語らせたくないのである。そうすれば、ことはうやむやに葬むることが出来るのである。

それにもう一つの用心があつた。それは天津の領主工藤左近丞吉隆の聖人に対する御帰依の深さであつた。聖人の伊豆伊東の流罪中に、聖人はわざわざ御書を工藤氏に送っている程である。すなわち四恩抄という御書が、それである。

それ程に御帰依の深い工藤氏であつたから、それとなく、いつでも、聖人の身边を警備されていたのである。

八月に帰省された聖人が、三月たつても東条方から、手をつけられないでいたのは、工藤左近丞吉隆の無言の警備に負うところがあつた。

ところが、十一月になると、吉隆の夫人の懐婚の噂さがとび、それとともに吉隆が病氣である

との噂さがとんだのである。つまり、工藤宅はとり込み中との噂が、東条景信の耳にはいつてきた。

聖人を襲うのは正にこの時であると景信は考えたのである。ところがその聖人が、大胆不敵といおうか、または自分を馬鹿にしたのか、自分の屋敷のある東条村の小松原をぬけて、天津に行くというのである。

工藤宅に安産の御祈念に行くのか、病氣平癒にゆくのか、あるいは法事で行くのか、そこまでは景信は探らなかつたが、わずかに七、八名で聖人が行くというのである。

わが屋敷の近くを、永年来仇敵としてつけ狙う聖人が通るのである。恨みも深い十二年前の建長五年四月二十八日には、清澄の山を汚してはと、その帰途を待ち受けたが、内通する者があつたので取り逃がしてしまつた。

待てば、海路の日よりありで、今日今度こそは、聖人の方からわが屋敷の近く、わが親父の代に砂よけのために、村人に植えさせた小松原を間違ひなく通るといふのである。なんたるありがたさである。日頃唱える念仏の御恩を報ずるのはまさにこの時である。

今日こそ宿敵日蓮を討ち果たす日である。しかも、伏兵には最も都合のよい小松原の地である。三百の用兵を苦もなくかくすことができるであろう。

日蓮の一行が小松原の真ん中近くに來るまで兵を伏せておいて、機をみて一気に弓矢を注いだ

ならば、いかに日蓮といえども、逃がれる術はあるまい。

馬上の東条左衛門尉景信は、そのように作戦を頭に浮かべて、にっこりと微笑を面に表わした。

「そうれ」

右手を高く景信が上げると、軍勢は心得たとばかりに、左右に別れ、やがて、四分五裂すると、小松原の松影に姿を消した。ここに三百の伏兵があるかと誰れが知ろうか。

文永元年十一月十一日、あたりは、たそがれ時の午後五時頃であった。

浜風もひとしきり、大きな音をたてて松原の上をわたっていった以外は、物音ひとつしない。

東条左衛門尉も、馬からひらりと飛びおると、供の者に馬をひかせて、小松の影の床几に身をおいたのである。

一一

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

先頭に立つた鏡忍坊が、先達になって唱える題目である。

聖人の一行は七人。

ここが、聖人を宿敵とする東条左衛門尉の屋敷にほど近い、小松原であることを、一行の七名も十分に知っていた。

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

後陣になった乗観、長英の二人も必死となつて題目を唱えていた。

潮鳴りの音が東の方にして、潮風が、さあつと松の小枝をゆるがしていった時である。ばさつと、一本の矢が鏡忍坊の足許にささつた。

「すは……おのおの、御用意、御用意」

鏡忍坊が、声をかけて身を伏せるのと、一行にしゃがめと、いったような合図をしたのと同時であつた。

景信の同勢三百人が、一気に矢を射つたのであろうか。たちまちにして夕立のごとく矢がふりつづいた。鏡忍坊は、思わず砂に鼻をうずめるごとく身を伏せたが、聖人いかにと、ふりかえつてみると、こはいかに、風渡る枯尾芝の原に立つ地藏のごとく慈顔の面をして、聖人は雨のごと



くふりそそぐ矢の中に、凜然としてたたれていたのである。

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

これは聖人の口からほとばしる題目の声であった。

「おう……」

鏡忍坊は、怒りの声を発すると、身をおどらして、近くにある松の樹をむんずと掴んで「うー」と吠えたかと思つたが、すつぽりと松の樹を根ごとひき抜いてしまった。

「危ない、お聖人さま」

といいながら、聖人の側によつて、ふる矢を松の樹と、自分の身体を持つて防ぐのであった。

「鏡忍坊は、今日のこの法難のために生まれてきたことが只今わかつたぞ。わしは死ぬ。いいか、その代わり、ほかの者はお聖人を必らず助け参らせてくれ、いいか」

「鏡忍坊っ」

「おつ、乗観と長英つ、頼んだぞ。わしはここを討つて出る。その隙に、お聖人をお助け申せよ。間違つても、右にいつてはならんぞ、左へ左へ、山に逃げて行け、いいか」

こういい残すと、鏡忍坊は大声でどなった。

「東条左衛門尉はいずこにかくれておるか。こしぬけ侍、待ち伏せをして遠矢にかけるとは、卑怯な奴等だ。鎌倉には、こんな卑怯な主人に仕える者は一人もおらんぞ。

卑怯者、卑怯者、ものかげにかくれて矢を射かけるとは、東条左衛門尉の家来には武士はおらぬのか……」

ふる矢の中に、まつしぐらに飛び込みながら、松の樹を右に左にと、ふりまわし、朗々たる声で、鏡忍坊がいい放った。

「卑怯者、卑怯者。松の木蔭にかくれて矢を放つとは、東条左衛門尉は東国一の卑怯者とみてとった。わあつはつ、わあつはつはつ」

鏡忍坊は、ふりそそぐ矢音にまけぬ声をたて、松の樹を杖にして小松原の真中につつたつと、嘲笑の声を、弦音にもまけぬ程に放つのであった。

誰が下知したか、卑怯者と再三再四呼ばわれた故か、矢は、はたと止った。瞬時の間、嘘のような静けさがあつた。

だが、つぎの瞬間それも、鏡忍坊の大きな声とそれを、とりかこんだ東条勢の軍勢の叫び声に消されてしまった。

「であえ、であえ、東条の卑怯者の家来ども。おう、でてきたなあ」

卑怯者と罵られて、怒り心頭に発した東条の兵達は、さすがに弓矢をすてたか、白刃を秋の野

のすすきを連らねたごとくして、松の樹蔭より身を現わして鏡忍坊をとり囲んだ。

「ようし、ようし、東条の軍勢はこの鏡忍坊三百人とみたぞ」

鏡忍坊はわざと、味方にきこえるようになつて、非常の事態を知らせ、乗観、長英以下の人がとに、一刻も早く、聖人を落せという心持であつたろう。

「わが聖人の味方はわずかに七名じや。これをそこここにかくれて、姿を消すとも、東条左衛門の軍勢は、たしかに三百人はおるとみてとつた。卑怯者、遠矢はやめても三百人の軍勢で七人の命をねらうとは、東条左衛門尉はたしかに東国一の卑怯者ときまつたぞ……」

「さあこい、来ぬか……」

鏡忍坊は、劍の林の中に、松の木をふりまわしながら、飛びいった。

「見よや。見よ。法華経に命を捧ぐるものの最後をみい。日蓮大聖人の弟子、鏡忍坊日暁が最後をみよ……」

この声に応じて、東条の軍勢がときの声をあげて、鏡忍坊を始め、聖人の一行にうってかかり、あとは乱戦となつた。

「お聖人さま……こちらへ……」

乗観、長英は、聖人の手をとらんばかりにして走りだした。二人の気持を察してか、聖人が走りだしてくれたので、

「ありがとうございます」と乗観がいえば、長英は、

「もつたいのうございませう」と両頬に涙を流していた。

「わあっ」

という声が出て、三十人程の東条勢が、行く手をふさいだ。

身に寸鉄を帯びるでもない徒手空拳。乗観、長英は、いかにして聖人を守ろうとするか。

二人とも、白刃の中に法衣の袖をまくって、かいくぐってゆくより外に術はなかった。

小松の枝を楯にして右に逃げ、左によけて、白刃をふせぎ、時をかせぐのが防戦の手段でしかなかったのはまことにあわれであった。

聖人はとみると、この小松原中にたった一本たつておる大きな榎の樹の側にたつて、静かに、

一心 欲見 仏

不自 惜身 命

と経文を誦せられておった。

「やあやあ日蓮。よも、この顔を忘れてはおるまい。余は東条左衛門尉景信なり……」馬を走らせて東条左衛門尉は、声をかけながら、聖人をめがけてまっしぐらだ。

「思えば建長五年に、汝を討ち洩らしてより、ちょうど今年で十二年目、うどんげの花咲く思いとはこのことか」

東条左衛門尉、馬上よりよばわりながら聖人の身近くせまつたが、経文を静かに誦する聖人の姿に気おくれしたか。あるいはまた、小雀をつかまえる鷹のごとき優越感を味わうためか、すぐとは聖人によらず、馬上で一刀をすらりと抜くと、槇の周囲を馬で一周りしたのである。――〔注、この槇は降神槇と呼び、いまなお浄庭に存す。樹齡千有年。周囲一丈五尺、傘のごとく枝を四方にたれ頗る偉觀である。鏡忍寺史による。〕（千葉眞安房郡東条村広場境忍寺境内所在）

槇の周囲を一周りして、勢いをつけた東条左衛門尉は、

「思い知ったか、日蓮っ……」と馬上より刀を振り上げたが、

南無妙法蓮華經 南無妙法蓮華經

不思議っ。

堂と音たてて地に呻いたのは、左衛門尉景信であつた。

馬は、ひひんと悲しい声をたてて怒り狂った奔馬となり、わが主人を足げりにしたかのようにして、槇の小枝を馬首でうち折りながら、まっ直ぐに飛んでいってしまった。

こわ、どうしたことか。

傘のごとく、枝をたれている槇の樹である、左衛門尉が、馬に威勢をつけ、一刀を聖人めがけ

て切りおろした時、聖人は一足さがって傘のごとくたれさがる槇の枝の下に難をさけたのである。いわば木遁の術というところであろうか。左衛門尉の馬は槇の小枝につきあたり、槇の葉で眼玉をついたから、馬はたまらず狂いだしたのだった。

左衛門尉の刀の手許も狂って、聖人の命を奪うにはいたらなかった。

だが、聖人の額には血が流れていた。

右手の念珠の親珠は真二つに割れていた。

「文永元年十一月十一日頭にきずをかほり、左の手を打ちをらる」（聖人御難事抄）と聖人が自ら書かれておるのは、この時のことである。

「お聖人さま……」

槇の樹のふもとに、駈けよつたものが二人いた。

「おお、これは、忠吾、忠内の二人ではないか。どうして。ここへまいった……」

「主人、工藤吉隆殿、お聖人さまのお出ですが、あまりおそいので、出迎えにここまでまいりましたところこの法難、只今あれにて、東条勢を相手にして、見事な働きでございますぞ、してあれなるは……」

聖人の側から、五、六間向こうの砂地に呻いておる東条左衛門尉を指した。

「あれは東条左衛門尉景信じゃ、助けてつかわせよ……」



聖人の慈愛にみちた言葉である。

「東条左衛門尉景信でございますか、あれが、はっはっはっ……」

忠吾、忠内の二人は思わず笑った。

そして、異口同音に叫んだ。

「やあやあ東条の勢、近くにあらば、すぐきたれ、汝等の主人左衛門尉景信は、聖人の御威光に打たれて、ここに腰をぬかして呻いておるわ…命をとるは安いことであるが、聖人が助けてつかわせのお言葉があったから、助けてやるぞ…さあ、さあ」

二人の叫び声の中に、あわてふためいて、十数人の東条勢が走りよつて、一団の中に左衛門尉をかこみ、逃げるようにして小松の蔭にかくれさせたのは、むしろ滑稽であった。

## 二

「お聖人さま……お聖人さま」

長英が手負いながらも、鏡忍坊を肩にしてよるけながら、お聖人さまと叫びつづけて、槇の樹のあたりにたどりついた。

「おう、長英、日蓮はここにおるぞ」



聖人は、忠吾、忠内が、一生懸命になって、額の傷を手当てするのに、身を任せておったのである。

「おう、お聖人さまは、ご無事でございましたか。これ、鏡忍坊、お聖人さまはご無事であるぞ、しつかりせい」

だが鏡忍坊の口は動かなかつた。

「鏡忍坊、今の今まで、お題目を唱えておったではないか、なぜ、その口から、お聖人さまと声がでぬ、これっ」

長英は鏡忍坊を肩からおろすと、その身体をゆすぶるようにしたが、鏡忍坊の身体は、お聖人さまに向つて、お辞儀をするような恰好で堂と地に倒れてしまったのである。

「鏡忍坊、こときれていたのか……」

長英はかぶさるようにして、鏡忍坊の身体の上から声をかけた。

「残念だ。鏡忍坊、鏡忍坊、念仏門徒の刃にかかつて死ぬとは情けないぞ」

長英は顔中を涙にして泣きぬれた。

「長英……」

「はこ」

忠吾、忠内の応急の処置で、傷の手当てを終わった聖人は、やおら立ち上ると、

「名を呼ぶでない。臨終只今にありと心得て、信心をいたして、南無妙法蓮華經と唱える人を、是人命終、千仏は御手をさしのべ、恐怖せしめず、悪趣に墮さしめずと經文に説かれてある。鏡忍坊は今が今まで、お題目を唱えておったというではないか……」

「臨終の時ばかりではありません。南無妙法蓮華經と唱えながら、奮戦し乱戦し、南無妙法蓮華經と叫びながら法敵の刃を身に受け、南無妙法蓮華經と唱えながら命たえたのでございます」

「ならばなおのこと、安祥として鏡忍坊を、寂光の宝刹にゆかしめよ。その名を呼んで、一念のこの世に残るようなことをしてはならぬぞ。」

長英つ、東条左衛門尉は落馬の醜体をさらして、引き上げたとはいえ、まだまだ伏せ兵がどこかにひそんでおるに違いない。鏡忍坊の死体を、この人数で運ぶのも人目につく。幸いここは砂地だ。わしがここで、自我偈一卷をあげる間に穴をほれ。忠吾、忠内お二方も手を貸してもらいたい。よいか……」

聖人は静かに自我偈を読み始められた。

自我偈 仏 来

所經 諸 劫 数

：  
：  
：  
：  
：  
：

三人は必死になって力を合わせて穴を掘った。わずかに土をかぶせるにたる穴を掘り上げると、鏡忍坊の死体をそこにおき、そそくさと土をかぶせてめじるしに一本の松の苗木を植え、乾いた砂を上からかぶせて、その所在をくりました。

本当の仮り埋葬である。

聖人の読経がやがて唱題にかわると、他の三人も、力一杯に唱和した。

聖人は静かに歩をすすめて埋葬の場所に近づき、唱題をやめられたが、やがていいさとすがごとく口をきられた。

「鏡忍坊、鏡忍坊、日蓮は、朝な夕な、一心欲見仏、不自惜身命と、弟子達に教えていたが、今、お前がそれを実行した。日蓮さきがけしたり、和党どもつづけよかとは、日蓮が日頃の言葉であるが、鏡忍坊、お前がぬけがけの功名を立てると思いがけなかった。法華経に命をささげた今日のあつばれなる振舞いは、日蓮は終生心に忘れぬぞ。

南無妙法蓮華経

南無妙法蓮華経

.....

この法華経を弘むることは、如来の現在すらなお怨嫉多し、況わんや、仏の滅度をやとは経文にのせるところである。鏡忍坊は今それを身でしめた。だが、法華経に捧げた鏡忍坊のこの命

は、決して無駄となるものではない。大法弘布、広宣流布の暁まで、法華經の雄々しい華として咲き匂うであろう。

鏡忍坊よ。弟子鏡忍よ。この小松原にふく松風が妙法の琴を弾じ、松のみどりは、汝の功績を永久に語り伝えるであろう。即身成仏とは鏡忍坊のごとき最後をいうのであろうか。

南無妙法蓮華經……」

聖人が一歩すすんで、今植えたばかりの松の苗木に進んだ時、ぽとぽと落ちたのは、松の露か、聖人の涙であつたらうか。

鏡忍坊をそうそうのうちに埋葬した聖人の一行が、涙をうち払って歩を早め、松原の中を身をかくすようにして、一、二町きた時である。意外なものに遭遇したのであつた。それは工藤左近丞吉隆の殉難であつた。乱戦でいつか長英と別れ別れになつた乗観がそこにいた。工藤左近丞はよほどの深傷とみえた。

「左近丞殿、日蓮ですぞ、しつかりなされよ、しつかり……」

聖人は左近丞の側によりそつた。乗観が鎧をとつたとみえて、身軽になつた吉隆であるが、その戦衣は真赤になつていた。

「お聖人さま、工藤左近丞吉隆、今生のお暇請いでございます……」

「なにをいわれる吉隆殿、これしきの傷が何事です……」

「おはげまし下さるお言葉は、まことにありがとうございますが、吉隆命数を悟りました。すぎてみれば八十の齢も三十の年少も、どれ程の相違がありましたか。お聖人さまご覧のごとく、吉隆の法衣は、念仏門徒の矢に当って、所々方々が、傷だらけでございます。靈山に一度参じて、新らしき法衣に着かえてまいりたいと存じます。いかがでございますよう」

「ああ、あっぱれ見事なお覚悟でございます、そう申されてはなにをいいます。お覚悟召されよ。ご日蓮が弟子鏡忍坊もたった今、法華経に命を捧げて、靈山に旅立ちました。おそらく、先達となつて、吉隆殿の道案内をいたすでしょう」

「鏡忍坊も討死されましたか。靈山詣りの法友が出来たというもの、いさましい限りでございます。だが、お聖人さま、吉隆今生一生の願いがございます」

「何事ですか。その願いとは、日蓮必らず叶えて進ぜますから、申されてご覧なさい」  
今や、息たえなんとする工藤吉隆は、背後にまわつた乗観にしつかりとだきとめられて、聖人  
にうのであつた。

「お聖人さま、お聞きでもございませうが、只今、奥は懐妊しております。生れた子供がもし男子でございましたら、なにとぞお聖人さまのお弟子の一人にお加え下さいまし。そして大きくなりましたら、お聖人さまからおさとし下さい。この吉隆は東条左衛門尉を怨んで死んだのではけつしてない。法華経に命を捧げて死んだのである。したがって、仇討ちなどということも毛

頭思つてはならぬと。子が親の仇を討てば、討たれた親の子はまた仇を討つでしょう。果てしない修羅の巷でございます。怨讐をすてて仏道において身をたてるよう、これが唯一の父親への報恩であると、なにとぞおさとし下さいまし……」

「吉隆殿、日蓮たしかに心得ました。生まれた子が男であつたら、必ずこの日蓮が申し受けて弟子にしよう。法華経に命をさされた吉隆殿をつぐ程の立派な僧侶にいたしてみせよう。ご安心なされ。さるにしても、吉隆殿の心がけ、在俗の志とはまったく異なる。身には甲冑を体していても、心は僧侶だ。只今より、妙隆院日玉上人と名乗らせたまえ」

忠吾、忠内、乗観、長英の四人が「はっ」と一勢に声を出したが、異口同音に工藤吉隆の、消えんとする玉の緒を引とどめようとして叫ぶのであつた。

「吉隆殿。御身に上人号を賜わつたぞ、喜ばれよ、破格の上人号、お弟子の中にも未だ賜わざる上人号じゃ。日玉上人、ああもつたいない」

吉隆は最後の努力をして眼を開けたが、につこり笑つて、聖人を拝んだ。

「きこえたか」吉隆はうなづいた。

聖人は合掌した。

「南無妙隆院目玉上人……」

雁が声高く鳴いて、清澄山の空にむかつてとんでいった。

#### 四

日がくれた。

聖人はともかく、弟子の乗観、長英達が腹の底から願つておつた、日が暮れたのである。

文永元年十一月十一日の日がくれた。

大將が落馬して、戦意をなくしたとはいへ、東条の軍勢はまだ全部引き上げてはいなかった。

ひそかに、聖人の姿をもとめて、ここかしこに動いている気配がある。

鏡忍坊の亡骸は砂地に埋められ、法華経に殉死した工藤吉隆の死体は家来が背負つて、これまた危地をのがれていった。

さて聖人の一行である。

どうこの虎口を脱したであらうか。

東条左衛門尉が聖人の命をねらつたのは、単なる念仏の敵というだけではないのは前々述の通りである。東条左衛門尉は自分の料場として、聖人の得度の寺である清澄寺の裏山が欲しかった。鎌倉には、すでに手をまわしてほぼその了解が出来上つていたので。清澄寺の裏山には猪がおり、鹿が沢山におつた。一步その獣類が、寺領にはいつてしまうと、殺生禁断の地区という手

前があつて、自分の思うままにならない。

その禁札をとつてしまひたかつた。禁札をとるには、その土地を自分の所有にすればよいのである。

鎌倉にまでも了解がついておるのに何故それがかなわなかつたか。清澄寺にも東条左衛門尉に味方した円智、実成等があつたが、これに反対する聖人の兄弟子であつた浄頭、義浄等もおつた。浄頭、義浄二人は、鎌倉にある聖人にいちいち連絡して、東条の横暴を訴え、清澄寺の寺領を守ることに努力したのである。鎌倉の日蓮がなければ、自分の思いのままであるとは、東条左衛門尉の感慨であつたらう。

その日蓮が、自分の屋敷近くの小松原を通るといふのである。聖人の生家小湊は東条の領地にある。必らずや、尋ねてくるだろうと思つたのに、父妙日が死んでも帰つてこなかつた。三年忌にも帰つてこなかつた。「日蓮はこの東条左衛門尉が恐ろしいのだなあ」と東条左衛門尉はやや満足しておつたのであつた。ところが、故郷に帰らなかつたのは国諫にいそがしかつた聖人の都合であつたのだ。東条左衛門尉などは、聖人の眼中になかつたらしい。その証拠には、父妙日の七回忌にあたる本年には、堂々と生家の小湊に帰つてきたのである。

そして聖人が文永元年十一月十一日、東条の屋敷に程近い小松原に現われたのであつた。なんで東条左衛門尉がこれを見逃そうか。



小松原の法難はかくして起った。

鏡忍坊は法華經にいさましく命をささげて、文字どおり小松原の露と消えた。

工藤吉隆は在俗の身をもつて上人号を聖人自から賜わるの榮譽を得て殉難した。

さて聖人はいかがしたであろうか。

聖人の伴をしたのは忠吾、忠内の二人であった。乗観、長英の二人は重傷を負ったが、密集することを不利とさとしてめいめに逃れていったのである。

小松原から程近い小川を渡ると、山坂道にかかるところに、ちいさな洞穴があった。洞穴の上にはうらじろの葉が茂って一見所在がわからない洞穴であった。

勝手を知っている忠吾、忠内の二人は、聖人をここに案内したのである。

「お聖人さま、しばらくすれば日もとっぷりくれるでしょう。ここでお休み下さいまし、われら二人は、一人は華房へ、一人は天津へと駆抜けて、お聖人さまの御無事を知らせ、味方をつれてお助けにまいります。けつして、ここから出ないようお願い申します」

「まだまだ東条勢がうろうろしておる様子でございます。一人の僧侶の命をねらうのに軍勢をくりだすとは、昔からきいた話がございませぬ。また、このあとまたんとはありますまい」

「忠吾、忠内殿、この日蓮は不思議な法師であるよ。文応元年の七月には数千人の人びとによって松葉谷の自分の草庵を焼き討ちされたことがある。弘長元年には、路上で捕えられて、一回の

取調べもなく、伊豆の伊東に流罪された。この度はこの小松原での刃傷となったが、まことに、今日の存命不思議と申すばかりでござる。法華経には、末世にこの法華経を弘むるものは、たびたび刀杖の難に逢い、しばしばところを追われるとあるが、日蓮が所行はこの法華経の経文の通りである。難のきたるをもつて喜びとなす、とは、小松原の法難にのぞんだ、日蓮の本日の感慨でありますぞ」

「お聖人さま、もつたいないことでございます」

忠吾、忠内は、聖人の前に合掌するのであった。

聖人はこの洞穴に一夜をあかして、次の日に華房の里に帰えられたのである。

聖人が洞穴にかくれておったのを通りかかった老婆がみつめて、自分の背中にしよつた真綿をとりだすと、額の傷に風をあてぬようと差し上げたことは、有名な話である。御影様にお綿を上げる行事はこれに由来するということである。

洞穴の側の川を、夜長川という。コ僕をこの洞穴にあかした聖人が、夜が長いので「夜が長いなあ」といったところから、つけられたのであると今も村人は語り伝えている。

聖人がこの洞穴に寒い一夜をあかしておった時、東条左衛門尉の屋敷では大変なことが起きて

いた。合戦の中場で主人が落馬したなんというのは聞き苦しい話であるから、家来の者もあまり語らず、主人をお屋敷にお届け申して医者を呼ぶさわざもあつたが、たいした傷でもないので、拍子ぬけたような顔をして医者は帰っていった。夜も更け渡つた頃である。主人の居間からは、きくにたえぬ呻り声がきこえて、家人は全部起きてしまうという騒ぎであつた。

「苦しい、苦しい」と呻りつづけるのであつた。

まさに断末魔の苦しみというところであろう。現代の医学からいうと、いかなることになるのかわからないが、末魔というのは印度の古代語すなわち梵語の音写であつて、日本語でいうと死穴即ともいうのである。死穴とは、人間の身体の外部、内部にわずかな傷害であつても、生命を失うにいたる部分があることを死穴という。これが六十四か所から百二十か所あるという。水火風の三大の二が増盛して末魔にふれる時は、非常な苦痛を伴い遂には命を断つというのである。

「刀をもつて身肉をきられ、あるいは臼のようなものにて粉にされ、または砥石をもつて身をとぐような苦しみを得るを断末魔とは申すとかや」と書物にある。

東条左衛門尉の死は七転八倒虚空を挿んで死んだと表現すべきであろう。これは人間の最後としては最も下の死に方である。七転八倒というのは断末魔の苦しみである。虚空をつかむというのは、死ぬ人の気持が、下に落ちてゆくような気持になるから、虚空をつかみ、したがって眼は反対に上につりあがるようになるのである。これは「地獄に墮つる者は黒色となる上、身重きこ

と千引の（千人の力で引く石というから大変に重たいの意）石の如し」と聖人は千日尼御前御返事に言われておる。人間が怒るとその血が凝固するというのは現代の医学が教えるところである。七転八倒の苦しみをしては血も凝固して、色も黒くなるであろうと思うのである。

死ぬ時には両眼が下をむいておらなければならぬ。何故下を向いたのかよいかというと、死ぬ人の気持が上に登って行くから、下をみるような気持になつて、眼が下を向くようになるのである。これが大往生の時の眼のあり方である。同じく千日尼御返事に「善人はたとい七尺八尺の女人なれども、色黒き者なれども臨終に色変じて白色となる。又軽きこと鷲毛の如し、やわらかなることろめんの如し」とある。この御文中にあるとろめんというのは、そうめんなどの類と思つたら大間違いで、とろとは梵語でとろという草木の名でそれからとつたわたのことを、とろめんというのである。あるいはまた綿糸に兔の毛をまぜて織つた舶来の布のこととも言うのである。ともかくも、臨終の時は、色が白くて、こわばらないことが成仏の現証となつてゐる。

臨終の一念は無量劫をひくといつて、臨終の最後の一念の大切なことを言つてゐる。生死大事血脈抄に「臨終只今にありと心得て、信心を致して南無妙法蓮華經と唱える人を……」と云うことがあるが、これも臨終の正念を教えたものである。

ともかく、東条左衛門尉は、聖人に害をあたえた仏罰によつて、狂死したのである。

報恩抄の御文中に景信が早死したことがみえている。